

小松神社の村祭り

B: 7月15日 祇園祭(ぎおんまつり)

【おぎおんさん】【おかくろさん祭り】とも言う

《小松社の夏祭り》(小松社:祭神=平重盛)

夏祭りの代表とされる行事で、氏神様(小松内大臣 平重盛 卿)へ疫病退散・五穀豊穡を祈念する祭り。

祇園祭は八坂神社の祭りとしてだけではなく、ひろく夏祭りの代名詞として、各氏神社や路傍に祀られている地藏・観音・天神様などの祭りにも祇園さんと呼ばれています。

本来は、天禄元年(西暦970年)旧暦6月15日【新暦7月15日】に疫病退散を祈願して、京都祇園社(現・八坂神社)で行った祭りが、祇園祭のはじまりであるといわれています。

現在では、新暦7月15日前後に、全国の八坂神社・須賀神社をはじめ各神社や地藏尊堂等の夏祭りとしてひろく行われています。

暑さとともに病魔や水魔の跳梁(ちょうりょう・反徒や悪人などが勢力を伸ばし、好き放題なふるまいをすることの意)で疫病がはやり、稲の害虫も出始めます。このようなもろもろの災厄(さいやく・不幸な出来事、災難の意)を鎮め、祓え流すのが祇園の行事です。

田植えも済み、一段落した時期でもあるので疫病退散・五穀豊穡の祈願のお祭りとして親しまれてきました。

胡瓜(きゅうり)の切り口が祇園さんの紋に似ているのでその日には食べてはならないということもあります。

佐賀平野では、ちょうどサナボイの時期でもありますので、祇園サナボイともいい、田植え終了頃の縁日として祇園祭が行われているところもあります。

しかし、小松部落でのサナボイは、各農家または地主単位で行われていたようで、小松社の祭りにはなっていません。

また、子どもたちがお世話をする祇園を【豆祇園】とか【地藏盆】ともいいます。7月～8月にかけて行われる集落に在住する子どもたちの楽しい祭りです。

本来は、子供たちがお盆明けに、初盆の家などを回って、提灯をもらい受けて飾りたてて[今晚はお地藏さんの灯籠がけだから御参拝下さい。]などのふれ声をして部落内や各集落を回り、参拝者からは賽銭(さいせん)をもらい受けるお盆の行事でしたが、いつの間にか独立した行事になったものと思われまます。飾りたてる提灯が多いことから【千灯籠・せんとうろう】または【千灯籠祭り・せんとうろうまつり】と呼ばれるようになります。

【京都八坂神社の祇園祭について】

今では【八坂神社】の【祇園祭】として知られていますが、

明治維新までは【祇園社】の【祇園御霊会(ぎおんごりょうえ)】、略して【祇園会(ぎおんえ)】と呼ばれていました。

【祇園御霊会(ぎおんごりょうえ)】は、疫病退散を祈願したお祭り、当時平安京は人口が増えることもあり、たびたび疫病が流行し、鴨長明(かもめのちょうめい)が方丈記には、野垂れ死にした人の死骸で鴨川がせき止められたなどとも書かれているほどで、人々は祭り(たたり)や疫病(えきびょう)の恐怖に脅(おび)えていたところのことです。

貞観11年(西暦869年)に平安京の国の数66本の鉾(ほこ:祭祀用の剣)を立てて悪霊を集め祓い、インドの疫病神【牛頭天王(こずてんのう)】を祀り、祇園天神とも称された【感神院祇園社】に神輿(みこし)3基を送り、御霊を鎮めるために祀りました。

やがて平安末期には疫病神を鎮め退散させるために神輿渡御(みこしとぎよ)や神楽・田楽・花笠踊りや山鉦(やまぼこ:祭礼の山車[だし])を出して京内を練り歩いて鎮祭するようになった神仏習合の御霊会(ごりょうえ)が【祇園御霊会(ぎおんごりょうえ)】です。

【祇園社】は元慶元年(西暦877年)、藤原基経(ふじわらのもとつね)が自邸を寄進して、疫病退散の祈願ための建立された

言われています。当初の正式名称は【感神院祇園社】です。

つまり、【感神院】という天台宗の寺院と、【祇園社】の神仏混淆(しんぶつこんごう)の社でした。

明治維新の廃仏毀釈(はいぶつきしゃく:仏を廃し、釈迦の教えを壊すという意味)によって、仏教寺院の【感神院】は廃寺となり、

かわって末社の【祇園社】が、八坂神社と名称をあらためて、感神院の施設を引継ぎました。

また祇園社のある地域は【祇園】と呼ばれています。

【祇園】という名前は、【平家物語】の冒頭に出てくる【祇園精舎】に由来しています。

もともとは、昔インドの大富豪であったスダッタ(Sudatta)シュダッタ、音写:須達多)という人が、ジュータ太子より賜(たまわ)った

林苑(りんえん)を惜しげもなく釈迦仏に寄進し、建立された寺が祇園精舎という名前でした。

藤原基経(ふじわらのもとつね)の自邸を寄進して建立したという行為が、その言い伝えに似ているところから【祇園社】と

命名されました。インドの祇園精舎の守護神が、日本では天神として知られる牛頭天王(こずてんのう)であったので、

平安京の祇園社でも牛頭天王(こずてんのう)を祀ることになりました。

この牛頭天王(こずてんのう)は、インドの牛の頭に似た牛頭山に住んでいたとされ、その山に自生していた【せんだん】という

植物が熱病に効くことから、疫病を防除する神として信じられました。

また日本では、この牛頭天王とスサノオノミコトは同じ神だと信じられていました。スサノオノミコトは、一度は神々の国の中で

乱暴を働か追放されますが、その後改心し、八岐大蛇(やまたのおろち)を退治するという日本神話の神様です。

つまり、牛頭天王(こずてんのう)はインドの釈迦の生誕地(にん)に因(ちな)む祇園精舎の守護神・疫病神とされ、薬師如来の再来として

日本に伝来し、スサノオノミコトと習合したと言われています。

【祇園社】は、明治元年(西暦1868年)の神仏分離令のおり、このあたりが、昔【八坂郷】という地名だったところから【八坂神社】

と名称が変更されました。

【祇園祭】のその規模の壮大さと歴史の長さは世界でも有数です。日本の人々の精神の歴史とも言えます。

平安京から1000年以上も続く祇園御霊会(祇園祭)は、応仁の乱や第二次世界大戦では一時中断したものの、西暦1384年に

足利義満が、祇園社を比叡山から独立させたが、それ以降、祇園祭は経済的には幕府や国の支配下になったわけではなく、

祇園八坂神社の氏子をはじめ、町衆や京都の人々によって執り行われており、現在に至っていることに感心させられます。